

スタートから深いラッセル。急斜面をバンザイしてラッセルしたり、空荷でラッセルする様は、まさに日本の冬山を登っているようだった。しかし、日本のそれとは大きく違う標高の影響で、身体が思うように動かず時間だけが過ぎてゆく。テントサイトから1P急雪壁、3P右の雪稜へトラバース、4P雪稜を登るようやく頂上稜線へと出た。深い雪に苦戦し、時間は既に11時を回っていた。ここにきてようやく衛星電話が繋がったため、翌日の天気予報を日本から入手する。翌日の予報は悪くないものの、本日の予報もクリアとなっている。風雪にさらされ、どこがクリアなんだ！？と言いたくなるような天気ではあるが、視界はそれほど悪くない。頂上まで400m近く残っているが、置いていけるもの全てその場にデポして、少しの行動食と飲料、ロープ1本と最低限の登攀具を身につけて急いで頂上を目指す。風は強いものの雲の隙間からラカポシが見えることがあった。途中からは完全に雲の中で、帰路の方角を確かめながら進む。視界が悪いため、幾度となく偽ピークに一喜一憂しながら氷雪壁を進んでいくと、ついに登るべきピークが無くなつた。山頂からの景色はなく、感動に浸る余裕も一切ない。時間は14時半を回っており、ホワイトアウトした帰路のことが気がかりだ。風雪にさらされた平出のヒゲは、サンタのように氷が張り付いた。山頂から留守本部に電話を入れ、早々に下山にかかる。既にトレースはほとんど消えていたが、コンパスを使用しながらなんとか暗くなる前の夕方にデポ地に戻る。視界があればさらに高度を下げたかったが、風雪の視界不良のため、本日はこの斜面を削ってビバーグとなる。相変わらず夜中はスノーシャワーにテントを襲われる。

23日、相変わらずの風雪で目覚める。登頂の喜びなんかより、果たして安全にこの場を脱出できるのか。今やそんな状況と化していた。下山は雪崩やセラックの危険性が少ない初登ルートを選んだが、決して簡単なルートではない。東稜のプラトーはだだっ広く、視界がなければ下降路が見つけられない。視界が少しでも回復するよう、祈るような気持ちでテント内でスタンバイする。6:30頃、風は依然強いものの、視界が少し回復した隙を狙って出発する。雲の隙間から一瞬覗かせた下降路の東支稜へ進路をたどるも、行く手をセラックの絶壁に阻まれ



▲Summit kazuya(L) kenro(R)

る。初登ルートの下部は偵察できていたものの、中間と上部は未体験。アップダウンがある雪稜を下る程度にしか考えていないが、そう簡単には行かない。大きなセラックを迂回したり、セラックの舌端を懸垂下降したりと、過去の記録通りには連れなくなっていた。途中に3つのピークがあり、登り返しに少し苦労はするものの、徐々に視界も良くなり、風も弱まっていったため、できるだけ標高を下げることに専念する。偵察時に到達した地点まで来て、ようやく帰路の安全が確保されて、安心して幕営する。BCを出発して6日目、ようやくスノーシャワーに悩まされることなく、フラットで安全な場所にテントを張ることができた。

最終日、既に安全圏まで降りたように身体は錯覚したようで、足取りは重い。幾度となく横断した氷河も思い通り下れず、いつも以上に右往左往してベースキャンプに到着した。登頂時よりよっぽどベースキャンプへ戻った時の方が、込み上げてくるものが大きかった。何より無事に戻って来れたことに。



▲after summit kazuya(L) kenro(R)